

クリスマスソングと「神の不在」について

12月。街はツリーとイルミネーションで彩られる。クリスマスはキリスト生誕を祝う日だから、流れる音楽の中には、クリスマスキャロルや聖歌・賛美歌も多い。

こうしたキリスト教音楽に関しては、歴史的には信者を支配する道具として使われたという指摘もある。18世紀スペイン植民地下の南米を舞台にした映画「ミッション」（1986年公開）でも、宣教師たちが先住民たちに、言語よりも感覚的に訴えやすい音楽を用いて、教義や祈りの文句を教えこんだと思われる場面が出てくる。さらに、映画では布教に生涯を捧げる宣教師たちと、布教の名を借りて他国を侵略しようとする権力者との対立が、美しいミサ曲が流れる中で残酷に描かれる。しかし、黒人霊歌などは、馬小屋に生まれたイエスと迫害に耐えながらその子を育てた母マリアを、自分たちの不遇な境遇に重ねた黒人たちが、キリスト生誕を祝うため歌い伝えたもので、歴史的な暗い影に目をやらずとも、心が洗われるような曲が無数にある。世界中がクリスマスを祝うようになったのは、こうした曲の影響も大きいと言えるだろう。

さて、2月にはじまったロシアのウクライナ侵攻はまだ終わりが見えない。今年のクリスマスはジョン・レノンの「ハッピー・クリスマス（戦争は終わった）」が祈りをこめて世界中に流れるのではないだろうか。多くの人々が平和を望んでいるのになぜそれがかわらないのか。何の罪もない民間人までが犠牲になっていることに誰もが心を痛めている。自然災害や戦争で多くの命が奪われるたびに、なぜ神は見えないのか、なぜ助けてくれず見殺しにするのかという「神の不在（沈黙）」を口にする人も少なくない。

世界の残酷さや神の不在を目の当たりにした子どもたちに何を語るべきか。それでも大人たちには希望を語る義務があると思うし、先人たちもそうしてきたと思う。

ここで話を存分に柔らかくする。伊東四朗氏を取材した番組（2021年放送）で紹介されたエピソードだが、下積みをようやく抜けだそうとするかしないかの頃（50年以上前）、伊東氏の身に「青天のへきれき」（本人談）のようなことが起きる。国際的にも高い評価を得ていた映画監督市川崑氏が、いきなり畑違いのいちコメディアンに過ぎなかった彼を「好きな新進」として新聞で取り上げたのである。（このエピソードは小林信彦氏の名著「日本の喜劇人」にも出ている）伊東氏はこの幸運を振り返り、「ああいう大監督がコントを見ているということですね。それ以来、誰が見ているか分からんぞという気持ちにはなりましたね」と語る。さらに、翌年には大河ドラマ「天と地と」（1969年放送）でも主人公の家臣というシリアスな役に抜てきされる。それで、いつ、誰が、何を見ているか分からない。どんな仕事もことわらず誠意を持って応えるというポリシーが身についたという。（見ていたのは神ではありませんが、神にも感謝したかも知れませんね）

悲しいことに、我々は戦争や神の不在というあまりに大きな問題を日々考えながら生きてはいない。しかし、同じ水平線に我々の生き方や考え方を定めるなら、神や仏がいてもいなくても、「物事をよく考え誠実に生きる」「希望を持って自分のできることを精一杯にこなす」以外にやれることはないのではないだろうか。そして、子どもたちにもそう教えるべきではないだろうか、神でなくとも誰かがきっと見ていることも。

それでは、少し早いですが、平和な世界が訪れますように、メリークリスマス。

令和4年12月1日 大村城南高等学校長 中小路尚也